



Title	尺度含意と解釈
Author(s)	沖田, 知子
Citation	言語文化研究. 2010, 36, p. 45-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10982
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

尺度含意と解釈*

沖 田 知 子

Pragmatics copes with the discrepancy between what is said and what is implicated, namely linguistic underspecification. This is part of the inquiry into language and mind, how to cover this and recover the speaker's mind by way of pragmatic inference. More specifically, this paper deals with linguistic scales woven into expressions in order to detect how pragmatic inference works with regard to scalar implicature. The relevance-theoretic approach will account for pragmatic inference, strengthening and enriching the proposition in the utterance, in light of optimal relevance and then contextually governed variation in the speaker's propositional attitude and its possible interpretation.

キーワード：関連性理論，尺度含意，尺度解釈

1. はじめに

コミュニケーションでは、ことばでところが言い尽くせない、あるいは言い尽くさないことがあり、その部分は受け手の推論に任される。この不確定なことばとところの関係をどのように埋めていくのかは、発話解釈の大きなテーマである。ことばに尽くせないところにおける意味論的不足は、語用論的に補填や拡充をしていかなければならない。そのとき、どのような仕組みで補填や拡充が行われるのであろうか。

本稿では、伝え手の情報提示法が組み込まれた修辞表現からその意を酌み取る試みの手始めとして、数値や評価を表す言語的尺度を含む表現をいくつかとりあげる。議論の基礎として尺度含意 (scalar implicature) をめぐる議論を概観し、関連性理論の観点から整理する。さらにこのような尺度を明示的に含んだ表現から、それが織り込まれた表現まで対象を広げて検討し、どのように語用論的推論が働いているのかを考察する。

2. 尺度含意と焦点

Grice以降の語用論は、Hornや Levinsonらの新グライス学派と、Sperber & Wilsonや

* 本稿は、平成21年度に退職される木村健治教授と金子元臣教授の下で書類の書き方、とくにどの程度書くのか書かないのかのご指導を受けたことに端を発している。この場を借り、両先生から受けた数々のご指導に感謝申し上げます。拙論に対しの確なご指摘とご助言を下さった査読者の方々に謝意を表さなければなりません。言語文化研究科院生の清原葉子さんと中西充一さんとの議論で大いに刺激を受けたことも記しておきたい。なおことば足らずで意の尽くせないのは、ひとえに筆者の責任である。

Carstonらの関連性理論に大きく分岐してきたが、尺度含意もその争点の1つである。まず、Carston(1998)の議論を中心に、会話の公理の再編から、会話の含意である尺度含意をめぐる問題を概観することにより、関連性理論の強みを指摘し、さらに焦点という情報構造との関係を加えることにより、次章で行う例文分析の基盤を整えたい。

2.1 尺度含意

2.1.1 Griceの会話の公理をめぐる

Grice(1967)は協調の原則を提唱し、その具体的な行動規範として質・量・関係・様態の4つから成る会話の公理をあげている。そのうち、量の公理には、必要とされるだけの情報量を伝え、必要とされる以上の情報量は伝えないという、以下の2種の下位公理がある。

- (1) 1. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).

2. Do not make your contribution more informative than is required. (p.45)

Carston(1998:181)によれば、Grice以降はとりわけ情報提供性(informativeness)と関連性(relevance)の2種が重視されるようになり、そのどちらに重きをおくかで大きく分岐することとなった。新グライス学派は情報提供性を中心に据えるのに対し、関連性理論では語用論的推論を解く鍵は最適の関連性(optimal relevance)にあると主張している。なお、いち早く尺度含意に着目したHornは、Griceの質の公理(truthfulness and evidencedness)は残しながら、その他の公理を2つの一般原則QとRに再編した¹⁾。

- (2) The Q Principle is a lower-bounding hearer-based guarantee of the sufficiency of informative content (“Say as much as you can, modulo Quality and R”); it collects the first Quantity maxim and the first two submaxims of Manner, and is systematically exploited (as in the scalar cases just discussed) to generate upper-bounding implicata. The R Principle is an upper-bounding correlate of the Law of Least Effort dictating minimization of form (“Say no more than you must, modulo Q”); it collects the Relation maxim, the second Quantity maxim, and the last two submaxims of Manner, and is exploited to induce strengthening or lower-bounding implicata. (Horn 1996: 313)

Q原則とR原則を、聴者基点と話者基点、下限と上限、Griceの量の公理の2つの下位公理などといった対称的な関係においている²⁾。聴者に対する情報の十分性を保証するQ原則は、下限から尺度含意のような上限含意が生成され、一方、R原則では、話者の経済性と

1) 新グライス学派で、より関連性理論に近いとされるLevinsonは、量の第二下位公理をI Principle (a principle of informational enrichment)として独立させ、Q/I/Rに再編する。

2) Carston(2005:[11])は、Horn説を以下のようにまとめている。Q原則が含意をgenerate/ induceすると違う用語を使っている点と聴者と話者のバランスに、両者の論点が窺われる。

The Q Principle (Hearer-based): Lower-bounding principle, inducing upper-bounding implicata.

The R Principle (Speaker-based): Upper-bounding principle, inducing lower-bounding implicata.

なお、研究者のホームページからダウンロードした論文では、参考文献にあげた掲載誌での頁とは対応していない場合があり、便宜的に角括弧で示しておく。以下同じ。

の上限的相関から強化や下限含意が帰納的に推論されるとする。これに対し、聴者基点と話者基点と対立的に扱われているにも拘らず、どちらもGriceの公理と同様、話者に対する指令として提示され、両者が協調の原則のもとにあることになり、その結果バランスを欠くことになる、とCarston (2005:[11])では指摘している。

関連性理論第二版(1995)において最適の関連性の想定が修正され、労力と効果の対称性 (effort-effect symmetry) が担保された結果、意図明示的 (ostensive) なものとして最適の関連性の想定が一貫して希求されることとなった。程度を考慮することにより、従来指摘されてきた労力と効果の非対称性、一方に負荷がかかりかねない点を解消するものである。

(3) (i) The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.

(ii) The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences. (Sperber & Wilson 1995: 270)

認知効果と認知労力の十分性による下限の設定、そして同時に両面に上限を設定することにより、つり合いがとれたものとなる。特に(ii)においては、話者の能力や選択以上にはできないという上限が付加されている。Carston (1998:214) は、話者の能力や選択における相対化 (speaker's (flawed) abilities and (possibly conflicting) preferences) の結果、ときには聴者は多めに労力 (more-than-minimal effort) をとることがあるとし、次のような手順をとると説明する。

(4) (i) consider possible interpretations in their order of accessibility (i.e., following a path of least effort); and

(ii) stop when the expected level of relevance is achieved (or appears unachievable).

解釈プロセスでは、最小の労力からアクセスできる順に可能な解釈を求め、関連性の期待値が得られれば (または達成できないと分かれば) やめることになる。これは、聴者は関連性のレベルを期待し (the hearer is entitled to expect a level of relevance), その期待値は結果的に十分でなくても話者の手段やゴールに合致できればよいという緩いものである。これに基づき、さまざまな文脈による解釈の可能性や目標を想定した、柔軟な解釈が可能となるのである。そしてこれは、実は上述のGriceの量の第一下位公理における「さしあたっての目的のために」という担保条件にも係ってくるものでもある。

関連性理論では、労力と効果の対称性の観点を入れることにより、話者による言語化に費やす労力の程度にも影響を与え、基本的なコミュニケーションの目標とは別個の個人的選択なども関与して行われるとする。発話解釈における程度の差を許容し、その意味で最適性やアクセス可能性の順序ということが問題となるのである。

情報量に求められる条件は、対象となる言語表現に尺度が含まれているものはより明示的な形で反映され、その程度の差や最適性を論じることができる。次に、そのような尺度表現における含意をとりあげる。

2.1.2 尺度含意の表すもの

Griceの量の第一下位公理が、特に尺度含意との関係で議論されている³⁾。Griceの然るべき理由がない限りより弱い言い方をするなという考え方⁴⁾は、同一の尺度上に位置する要素間においても同様に想定される。その結果、同一の尺度上の下位要素が選ばれば、それより上位要素が成立するとは推論されない。つまり、より下位の言い方をすることはより上位ではないからということになる。

- (5) Thus, what is said in the use of a weak scalar value like those in boldface in the sentence of (19) [i. e. Max has **3** children./ It's **possible** she'll win. /etc.] is the lower bound (... *at least n* ...), with the upper bound (... *at most n* ...) implicated as a cancelable inference generated by (some version of) the first maxim of quantity. [...] Negating such predications denies the lower bound: to say that something is not possible is to say that it's impossible, i.e. less than possible. When the upper bound is apparently negated (*It's not possible, it's necessary*), a range of syntactic and phonological evidence suggests that this is an instance of the metalinguistic use of negation, in which the negative particle is used to object to any aspect of a mentioned utterance, including its conventional and conversational implicata, register, morphosyntactic form or pronunciation (Horn 1989: Chapter 6) . (Horn 1996: 312-313)

したがって、*at least n*という下限が論理的に含意(entail)され、*at most n* (=no more than *n*)という上限は推論されるので、結果として*exactly n*と解釈されることになる。同一尺度上のより下位の要素は当然成立するが、同時に上位の要素の否定も推論されうる。このような両面読みでは、その状況下で関連してなしうる最強の、あるいは情報量が最大のものであるという推論が付加され強められることになる。さらに否定が絡むと、否定されるのは下限であるが、上限が明らかに否定された場合は、メタ否定として機能することを指摘している。尺度含意の中心となる考え方は、以下のようにまとめられる。

- (6) The core idea is that the choice of a weaker element from a scale of elements ordered in terms of semantic strength (that is, number of entailments) tends to implicate that, as far as the speaker knows, none of the stronger elements in the scale holds in this instance. (Carston 1998:179)

尺度含意はホーンの尺度(Horn's scale)とも呼ばれ、明示的な数詞だけでなく、さまざまな序列のある尺度を含む。Levinson (1983:133)は以下のように、言語的な尺度は、情報提供性や意味の強さによって序列づけられた言語的な代替や対照表現からなるとする。

- (7) A linguistic **scale** consists of a set of linguistic alternates, or contrastive expressions of the same grammatical category, which can be arranged in a linear order by degree of

3) Grice (*ibid.*) 自身も量の第二下位公理が関連性に組み込まれる可能性を示唆している。

4) One should not make a weaker statement rather than a stronger one unless there is a good reason for doing it. (Grice 1961:132)

informativeness or semantic strength.

たとえば、以下の(8)aのsomeからは、bのnot allが推論される。someとallは同一尺度上にあるので、より下位のsomeを選択することで、より上位の否定であるnot allという尺度含意が導き出せるとした。これもまた、いわゆる一般的な⁵⁾ 会話の含意(generalized conversational implicature)として導かれるが、論理的含意と異なり却下または破棄可能(cancellable, defeasible)、また慣習の含意と異なり分離不可能(nondetachable)である。

- (8) a. Some of our neighbours have pets.
 b. Not all of our neighbours have pets.
 c. The speaker doesn't know whether all her neighbours have pets.

一方、Sperber & Wilson (1995²⁾: 276-277)は、(8)aの含意として、bと並べてcのような話者が知らない場合もあげている。単なる尺度上の含意関係だけではなく、話者の意図と連動させることにより、含意の程度をも加味して、弱い含意としている。この場合のsomeは、not allを含意する一般的な場合として自動的に引き出せるものではなく、話者の無知の場合をも想定している。さらに、(9)のやり取りでの、Maryの発言は、情報量の多い答えも労力なくできるのにも拘らず、あえて情報量の少ないものを選択している場合とも考えられる。話者がたとえ知っていても知らせたくない、言いたくない場合も射程に入る。

- (9) (a) Henry: Do all, or at least some, of your neighbours have pets?
 (b) Mary: Some of them do. (p.277)

- (10) C: Oh, many occasions?

W: Not many.

C: Some?

W: Yes, a few. (Levinson 1983: 121)

また(10)の法廷の反対尋問で、被告Wは嘘さえつかなければ、それ以上協調することもない、自分に不利になるようなことは言う必要はない立場である。いくら一般的な尺度含意があるとはいえ、ここでは軽々にnot manyはsomeのことであるとは推論することはできないので、明示的に尋ね直されている。これもまた、関連性理論では想定範囲内であり、柔軟に弱い含意形成にも資することになり、そこに最適の関連性が担保されればいい。Griceの“don't know” typeに、話者が知らせたくない“don't want to say” typeも併せて扱うことで、協調の原則を超えたより広範なコミュニケーションのあり方を示している。

さらにCarston (1995:237)は、語用論的な拡充は言表(what is said)の真理条件的内容に貢献するとする。新グライス学派では、語用論的推論はあくまで含意(what is implicated)に貢献すると考えるのと違って、会話の含意を表示レベルすなわち表意(explicature)で扱うことになり、語用論的侵入(pragmatic intrusion)を認めるのである⁶⁾。そして、この点は尺度含意も例外ではない。尺度含意は、話者の言語表現を基にして表意の形成に貢献する語

5) 尺度含意が会話の含意のうちの一般化されたものであるかについても争点である。

6) Bach (2005) などでは、implicatureとしてimplicatureと区別している。

用論的推論の一部であると同時に、同じ発話が文脈によって異なる表意、ひいては推意 (implicature) を伝達しうるのである。

2.2 情報構造

2.2.1 主題と題述

van Kappelvelt (1996) の Discourse Topic Theory (DTT) では、発話構造における主題 (topic) と題述 (comment) の位置により、尺度の解釈が導かれると指摘する。下例の four は (11) のような主題の位置で at least 読み、(12) のような題述の位置では exactly 読みになる。

(11) Who bought four books?

Harry *Comment* bought four books. In fact he bought seven.

(12) [Harry did a lot of shopping this afternoon.]

How many books did he buy?

#He bought four *Comment* books. In fact he bought seven. (p.411)

それぞれの答の前半部は、どちらも at least four などの下限読みを論理的に含意するが、four が題述位置にある (12) のみが no more than four という上限読みを含意する。上限読みから尺度上 four より上位の数は否定されるということになり、後半部の seven と矛盾することになる。下限読みでは主述の位置とは関係なく、尺度より下位の数値は成立するのに対し、上限読みは題述の場合にのみ問題となる。このような文脈に依存する上限に関する推論は論理的含意であり、弱い推論とするのは間違いであるとしている。

これに対し Carston (1998:201-202) は、このような推論は語用論的推論の結果と反論しながらも、表出命題に貢献するという観点は評価している。これは、entailment という用語の問題もあるが、語用論的推論が文脈依存であり表意形成に貢献しているとする関連性理論の主張に限りなく近づいたものである。続けて Carston は、van Kappelvelt の主述の違いによる観点は非常に興味深いが、解釈において基本的な原理が機能するようなより深い説明が必要であるとしている。また、上限読みは意味論的ではなく標準的破棄可能な推論 (a default defeasible inference) であり、本来語用論的なものであると反例をあげている。

(13) Q: How many months } have 28 days?

Which months }

A1: One—February.

A2: **They all do.** (Comment in bold) (p.229)

(13) の主題を求める疑問文 (topic-forming question) に対する答を補ってみると、A1 (One—February has exactly 28 days.) と A2 (They all have at least 28 days.) が考えられる。28 が主題の位置にある A1 では exactly 読み、題述の位置にある A2 は at least 読みとなる。上で見たように、van Kappelvelt の論では A2 の at least 読みの答が予測されることになるが、むしろ一般的な答は A1 であり、答が A2 と分かれば聴者はひっかけられたと思うと指摘している。これは、

疑問文の28といういわば有標の数値に対し、推論による調整が行われた結果と考えられる。さらに、Carstonは“*How many weeks have six days?*”のような愚問と比較すると、やはり聴者は質問を関連性のあるものとして解釈しようとしていると、破棄可能な語用論のプロセスにおける関連性の重要性を主張している。

- (14) Considerations of relevance (pointfulness) cannot be ignored and it seems very likely that the certainly strong tendency for number terms in comment position to be interpreted as *exactly n* and in topic positions as *at least n* is ultimately explainable in these terms too. (p.230)

しかしながら、語用論的推論のための基礎となる要素として、その情報の使われ方、あるいは情報提供度については考察しておく必要はある。むしろ、主題と題述という情報構造ではなく、情報としてのより深い機能、すなわち前提と焦点という観点から考える必要があるのではないだろうか。van Kuppevelt自身も‘focus domain’ (i.e. those that are part of the comment) (p.407)としているが、主題と題述の関係は、必ずしも前提と焦点に一致するものではない。また、前提は既定であるにしても、焦点にくる尺度がどのような含意をもちうるのかを考え、さらにはより複雑な構造への対応も考える必要があろう。

2.2.2 情報の焦点

情報提示において、文の焦点は基本的に文末に来る。最も基本的な型のS is PにおけるPの位置である。毛利(1992:4)は、「前提(Presupposition)と焦点(Focus)という関係で考えると、S is Pの基本的な機能は、前提の中の変項*x*に対して定項*c*を述語として与えることになる」と指摘している⁷⁾。つまり、焦点となる部分が問題となり、それに対し定項*c*の数値を付与するのである。また、このような情報提示法が組み込まれた分裂文などでは、焦点となる部分を明示的に再提示する。しかしながら実際には、焦点となる部分が文中で取り立てられずに織り込まれることも多い⁸⁾。たとえば、次の例を見てみよう。

- (15) a. He is old. [He is an old man.]
 b. He is ten years old.
 c. His age is ten. (毛利1972: 248)

毛利は、(15)bは「oldは老齢を意味せず、ten years oldとは『年齢（これがFunctor）が10（これが数値）』という意味である(p.249)」として、Functor-構文による文（関数構文⁹⁾）と呼んでいる。これは、aの述語構文（Predicate-構文）と区別され、oldの意味も当然異なることとなる。関数構文では、論理構造¹⁰⁾を満たす数値が示されて、文として完結するが、

7) 実際の用法を考えるには、このように題述というより、厳密にその中の焦点となるところに焦点をあてて考察する必要がある。

8) S is Pという形を単調に繰り返さず、文体を工夫してPの機能をその他の語句中に織り込んで埋没させることが行われる（毛利1992）。

9) のちに毛利(1992)は、これを「関数構文」と呼んでいるので、本稿ではこれに倣う。関数詞(Functor)は、ある集合と別の集合との間に写像関係を作るような演算子である。

10) この場合は、age(*J*)=10、oldはageの関数表示であり、数値10をとる。

この数値が焦点となる。aと比べると、bは同じ文法的構造をとりながら、本来焦点となるべき10という数値が修飾語句に織り込まれている¹¹⁾。またcは、bと同じ論理構造をもった関数表現であるが、関数の表現として抽象名詞ageが使われている以外は、aの述語構文と同じ情報構造で文末に焦点が来ている。いわば、aとbを繋ぐ位置にあると考えられる。これら3種表現の異同をまず押さえておきたい。

さらに毛利は、「Functor[絶対規定の表現]とPredicate[(数値を抑止、潜在させた)性質の表現] (p.253)」を「意味」と「意味対象」に関連づけて考察している。同じ語であつてもその使われ方により、その意味対象範囲が異なる点に留意する必要がある。絶対規定の表現は意味対象が広く、また関数として使われるのは数値とは限らないのも同様である。

(16) John is a good swimmer.

(16)のgoodも文中に織り込まれているが、実質的には「評価・評点など、広い意味の『数値』を与える情報焦点となっている」と毛利(1992:8)では指摘している。つまり、これら言語的尺度が情報焦点として機能していると考えられる。

2.3 情報提供における尺度の働き

このような言語的尺度が関連する表現で焦点が拡散した場合でも、何を尺度とするのか、あるいはそのとるべき数値の大小などについて、基本的な傾向がある。大きさ、多さ、広さなど、実際にとる数値が小さくとも、絶対既定の尺度の用語には大きい方が標準的に使われ、そうでない場合は有標化された尺度となる。たとえば(15)bでは、実際にとる数値とは関係なく絶対既定の尺度としてoldが使われている。絶対既定の尺度が表す範囲がその語の本来の意味より広いという非対称的な関係となる。注意すべきは、以下でCarston(2005: [6])も指摘するように、ことばでは言い尽くされていないという出発点は同じであつても、それをどう調整していくのかについては異なる点である。

(17) Recognition of the ‘linguistic underspecification’ of utterance content is one of the most important developments since Grice’s work, but, although it is widely accepted across different frameworks, there is much less consensus on how it is to be accommodated.

Horn(2005:192)も指摘しているように、Griceは含意を含んだ話者の意味(speaker meaning)の説明をめざした。これは、使用された言語形式の慣習的意味と密接な関係があるが、意図されないものは言わない(nothing can be said that isn’t meant)ことになる。これは上述の「ことば足らず」(linguistic underspecification)の指摘と考え合わせると、単に話者の問題としてだけでなく、それを聴者がどのように埋めていくのかという双方向からの取り組みが必要となる。そこで、関連性理論でいうところの推意が問題となる。関連性理論では、発話表出のみならず発話解釈にも目を向け、より広範な形で語用論的推論の働きを捉えていることになる。その議論を支えるために、次節では言語的尺度が明示されたも

11) この焦点としての働きは、中島文雄(1961)のHe is in the garden.などに見られるAdverbial Complement(副詞的補語)にも通じる。詳しくは毛利(1972)を参照。

のや尺度が拡散された表現などを扱ってみたい。

3. 尺度含意と解釈

比較や強調といった常用の修辭的構文には、話者の情報提示法が組み込まれており、その情報を焦点化している。このような差を対照的に反映させると、話者のこころが見えてくる。関連性理論では使われたことばを原資として表意、推意を構成していく。この点で、そのような情報提示法が明確に取られた表現から始め、ことばに十分表わし切れていない話者のこころを酌みとることを考えてみたい。最適の関連性に鑑みながら、特にメタ表示的な比較と疑似仮定の表現、また焦点拡散された圧縮表現を取り上げる。さらに踏み込んで、進行形表現の用法についても検討する。そして、このような尺度をめぐる表現から、どのような話者の認識を酌んで、聴者に解釈されるのかを見たい。

3.1 比較構文の解釈

以下の(18)aにおいて、基数詞のfiveが明示するのは字義通りat least five であるが、尺度含意からはat most five (no more than five)と限界点が導き出され、結局exactly fiveを表すことになるのは、既に見た通りである。次に、尺度の扱い方を明示した比較構文をみてみよう。

- (18) a. I had five dollars.
- b. I had no more than five dollars.
- c. I had no less than five dollars.

aという事実を述べるにとどまらず、b, cのように比較構文を使うことで、尺度に関する含意が明示化される。bは上限含意を明示化、cは論理的含意を明示化した比較構文といえよう。その結果、5ドルに対する話者の認識一少ないとする（上限読みb）のか、多いとする（下限読みc）のか—が推論できる。比較という修辭法により、上限や下限の読みを明示することにより、話者の事実認識が酌みとれる。

応用例をいくつかみてみよう。次のいわゆる「クジラの公式」でも、水中で活動し子を産むクジラは魚か哺乳類かという問題の決着に比較構文が使われている。

- (19) a. A whale is no more a fish than a horse (is a fish).
- b. A whale is no less a mammal than a horse (is a mammal).

どちらも一般に丸括弧の部分は省略されることが多いが、復元すると“horse.”で一様に終わっていた文の違いが顕わになる。第一公式(a)は明らかに偽であると分かること(a horse is a fish), また第二公式(b)は明らかに真であること(a horse is a mammal)を引き合いに出していることを入れて読み解けば、魚説(a)がありえないことか、哺乳類説(b)が当たり前のことか、は自ずと明らかになる。これを踏まえ、もう一度比較と否定にもどってみると、aではだめなものはだめでそれ以上にはならないと上限読み、bでは当たり前は当たり前でそれ以下にはならないと下限読みにたどりつくことができる。

(20) It might have been worse.

(20)の比較構文では、引き合いに出される「今」を補って、さらにその問題となる今の状態は酷いという文脈を反映させると、今よりもっと酷くなった可能性もあったという表意が形成される。その結果、現状のこれ位ですんでよかったという、いわば慰めの推意が形成される。省略された、比較されるべき現状がどういったものであるかの推論が生かされて、さらに推意が形成されることになる。

(21) An Irish notice of reward for an escaped convict: Age unknown; but looks older than he is. (毛利八十太郎1957)

このアイリッシュ・ジョークによる脱獄囚の懸賞広告では、実際の年齢より老けて見えると言うが、年齢不詳ではどう考えればよいのか。前文の年齢不詳から必ずしも脱獄囚はoldであるとは断定できないのに、looks older thanから老けているという推論を導きだしてしまう。つまり、絶対規定の関数詞oldは必ずしも字義通りの性質の意味を表わさない場合もあるのに、誤誘導の仕掛けにより、まずはなんとなく分かったような感じがする。この場合、当局が脱獄囚の実年齢を知らない場合ということ自体がおかしく、重層的に効果をあげ、まさにジョークたるゆえんである。

(22) a. He is as short as his brother.

b. He is as tall as his brother.

同等比較の場合も、前述の例と同様、aのshortを使った場合と比べると、bのtallを使った場合のほうが意味範囲が広い。つまり、aでは兄弟ともに背が低いという性質を表すのに対し、bではともに同じ背丈であることを表すだけで、必ずしも背の高低は問題とはなっていない。この場合、tallが絶対既定の尺度として使われているために、aと同じ含意も導きうる点で、意味範囲が広がる。aの方は、有標的に尺度を設定している。

このように、比較構文においては引き合いに何を出すかを対照的に見ることにより、話者の意識を掘り起こす推論が導かれることになる。

3.2 疑似仮定構文の解釈

毛利(1980:138-140)は、以下のJespersen(1940: § 21.65)を引用しながら、if節が疑似仮定として使われる場合を説明している。

(23) What we may term pseudo-condition is found when the *if*-form is used rhetorically to point a contrast, or to show that two statements are equally true.

if節が、「修辭的に、①その対照を示したり、②二つの陳述が同様に真であることを示すために用いられる場合」とし、「ある事象の成立をある特定の語で表現する場合に、その事象に対してその語を用いてよいということを確認する気持ち」が反映されて、「半ばメタ言語化している」と指摘している。この確認する気持ちは、会話の含意の棚上げ(suspend)に通じるものである。

田中(1997:124)は、if anyやif everなどは「その数値（程度）や存在に疑念を差し挟む」という意味で棚上げした表現であり、疑念を差し挟むことが出来る対象も「否定的な傾き」があるほうが棚上げしやすいとしている。そのため、否定相当句に付加され使われる例も多く、数値が限定的な場合は、下限つまり最低ゼロの可能性をも含意することになる。

(24) [i]t will have further effects, perhaps along the lines suggested by Welker, with a negligible, if any, increase in processing effort for the hearer.

(Carston 1998)

(25) Children begin by loving their parents. After a time, they judge them. Rarely, if ever, do they forgive them. (Wilde, *A Woman of No Importance*)

(24)のnegligible や(25)のrarelyのような否定的前言に対する付言として、とりあえず制限をかける譲歩読みとなっているが、結局いわば取り立てて言うことで低さを確認する話者の意識が浮かび上がる。

さらに田中(1997:120)は、(26)のような数量が限定されていない場合もあり、その場合はたとえ「疑念を差し挟んでも、その可能性が低いとまでは言っていない」と指摘する。むしろ、限定をうけない数値よりもその存在そのものに注目した伸展的読みとなる。

(26) Correct errors, if any.

その発展形として、明示的に下位の数値を引き合いに出して、下位のものでも成立するのだから、より上位表現の方が成立するのは当然と強める場合が考えられる。

(27) You are thirty, if a day.

(28) There is no secret of life. Life's aim, if it has one, is simply to be always looking for temptations. (Wilde, *A Woman of No Importance*)

(27)では、if you are a day oldと補って考えると、これが当然成立するなら30歳も少なくとも成立するはずと陳述を強めている。(28)では、少なくとも1つはあるとするならと担保することで、life's aimの存在を意識した表現となっている。Jespersenの②の条件を反映し、いわば一蓮托生の扱いにより、話者の意識を強く浮かび上がらせるものといえよう。

次に否定辞を含んだ P_i , if not P_j をみよう。いわゆる譲歩読みの「 P_j とは言えないまでも(少なくとも) P_i とは言える」の他に、伸展読み「 P_i ではあるが、ひょっとすると P_j とも言える」と曖昧であるが、 P_i より P_j が強い表現である。それをどう呼ぶかのメタ表示の対照という観点もあるが、表現の適切さの判断に尺度が絡んだものでもあるといえよう。

Horn(1972:48)は以下のように、尺度含意の観点から指摘をしている。If-not節を付け加えることで、尺度含意(prettyと言うのならnot beautiful)を棚上げした結果、その含意が成立しない(つまり、beautifulが成立する)可能性がでてくる。

(29) The use of pretty to describe someone, then, conversationally implicates the inappropriateness of every stronger element on the same scale, such as beautiful. By appending an if-not clause, as in pretty if not beautiful, we admit the possibility

that something stronger (in the same direction) *does* hold, and the implicature, like entailments and presuppositions, can be banished to a state of animated suspension.

田中(1997:129)も、if not表現はすべてat least読みを生じさせているものとして、 P_j さえ成り立つかどうかわからないのだから、最低限 P_i が言えるのは当然だ、つまり P_j を棚上げにすることで P_i を述べる効果がさらに上がるとしている¹²⁾。伸展読みの可能性は別にして、この指摘は語用論的效果をよく説明している。また小泉(2001: 208-210)は、「if notは棚上げ表現であるため、その推意が成立するのは半分半分であるということになる」ので、どちらの解釈になっても可能性は半分半分であるということになると指摘している。ということは、どちらになるのかは文脈によるということに他ならず、また文脈によってどこに焦点が当たるとなるのかも異なるということになる。

van Kuppevelt(1996:414)も同様に、 P_i , if not P_j の P_i の値は劣決定(underdetermined)の一部で、棚上げ表現全体としてみると P_i と P_j のどちらも成立しうるとしている。

- (30) The value P_i which it is assumed gives rise to an implicature is not a stable one as compared to other values which certainly give rise to an implicature. This value is merely a part of the underdetermined, nonunique value expressed by the construction as a whole. In the context of the suspension construction P_i , if not P_j , this means that either P_i or P_j is the case. In other words, as long as it is not known whether P_i is the case, it is unlikely that an inference would be induced as the result of it.

- (31) How many books did Harry buy?

Harry bought four *Comment* books, if not five *Comment*.

質問に対する答という形で論じているが、(31)の棚上げ節if not fiveも劣決定の一部であり、答え全体から一意的に決定されるものではないとしている。棚上げ表現全体として尺度含意が生じるのは、たとえば{4,5,6}の幅から決定する場合に、{4,5}の下位幅で答えるということは6ではないという含意を生じせしめる。この場合、上限含意を表すものとしてif not P_j が付加されることにより、 P_i との幅が設定される。この棚上げ表現 P_i , if not P_j が一体となって尺度(幅)を構成することにより、それに対して新たな尺度含意が生じる。疑似仮定を付加することにより、新たに幅を持ったまとまりが構成されるので、尺度含意はその幅に対して適応され、二重構造を呈すると考えられる。

ここで、 P_i と言いきらず、 P_i , if not P_j という形式が選択されたということに注目する必要がある。話者は P_i と P_j を1つのまとまりをなすものとみなしており、どちらに力点をおこうと、その落差や距離感は想定範囲内にあり、織り込み済みであると考えられる。毛利(1980:159)の譲歩読みと伸展読みの区別は必ずしも明確でなく、単に程度の差にすぎないのではないかという指摘にも通じる。このように対照的であっても1つのまとまりとしてみなすと、以下のような異次元のものをさす場合も説明できる。異次元のものにまとまりをつけることも、一種のメタ表示として対照的に扱われていることになる。

12) 田中(1997)ではp if not qで論じられているが、本稿では P_i , if not P_j に統一した。

(32) I was sure my career, if not my life, was over. (M. Schreiber, *Ten Things*)

(32)では、キャリアと人生を1つにまとめてみている。これは、キャリアを人生とはみなさない人もいるので、このようにひとくくりにすること自体からも話者の意識が窺われる。その結果、深い喪失感が導き出されることになる。

次例では、本来同一尺度上にはないはずの「背が高い」と「一本足」が使われている。

(33) The man was tall if not one-legged. (Kjellmer1975:144)

考えられる文脈として、背の高い一本足の男を紹介されることになっていた話者が、実際には背が高い二本足の男に紹介されたということが設定されている。本来、背が高いだけでは足がどうかということは結びつかないので、異次元の組み合わせとなる。このような、Kjellmerの文脈設定自体が語用論的性質をよく示しているが、小泉(2001:210)は、「通常、意味論的には尺度が考えられなくとも、ある場面では考えられる尺度も語用論的尺度と呼ぶことができる」としている。この場合、「卓立度」¹³⁾という語用論的尺度を想定すると、文脈によっては「背が高い」と「一本足」が1つのまとまりをなすことも考えられる。まさに疑似仮定構文では、このような1つのまとまりとしてアドホックに尺度を提示することに話者の意が窺われる。

(34) The picture of Chinag Kai-Shek that emerges is one that rivals Mussolini, if not Hitler, as the very model of a modern major dictator. (小泉/Horn 1989:241)

(34)では、MussoliniとHitlerが独裁者という点では同じ尺度上にあり1つのまとまりをなしている。小泉は、「通例はどちらが強いのかは文脈次第である(p.209)」としている。しかし、この語順で表現される限りにおいては、Hitlerの方が上位と話者がみなしていることになると考えられる。MussoliniとHitlerを1つのまとまりとして考える点には変わりはないが、その上位関係は、数値を含むものほど一意的ではないものの、話者の提示法と文脈によって自ずと決まってくるのではないだろうか。

疑似仮定構文では、Jespersenの①の対照の観点から譲歩読み、②の両立から伸展読みが発していると考えられる。話者が設定した尺度幅を、その幅の内容、あるいはその存在に目を向けているのかという、話者の意識をひきださなければならない。いずれにせよ、if節を付加することにより、そこまで意識した上でのことと自らのことば遣いを補強している点は変わりがなく、その意味で程度の差と言えよう。疑似仮定構文は、話者の選択による尺度が幅をなすものとして明示されたと考えられるが、さらにそこで設定された尺度幅に関する意識を酌みとり、解釈に繋げていく必要がある。

13) 小泉は「異常さの度合」としているが、本稿では目につくということで卓立度とする。なお、(33)の読みとして、小泉は「一本足とまでは言えず、背の高いくらいであった」もあげている。さらに、背の高い一本足の男を紹介された場合も想定できるのではないだろうか。この場合、卓立度から言えば、まず背が高いということの方が先に来ているのである。このような読みの可能性は、まさに文脈と連動して働く語用論的推論ゆえであろう。

3.3 焦点拡散構文の解釈

文の焦点となるべき部分をあえてはぐらかす非明示的な尺度表現について、まずその基本的な焦点となる関数をもつ表現を見て、その焦点が拡散していくメカニズムをみたい。また、焦点拡散(Focus Diffusion)の結果織り込まれた尺度を復元することにより、言わぬが花の効果も取り上げてみたい。

既述のように言語的尺度が、焦点とならず拡散して使われる場合がある。(15)b(He is ten years old.)は焦点となる数値が修飾語句として織り込まれているが、c(His age is ten.)では数値は述部に来ている。そのときのSの部分だけ(his age)を使うと、つまり実際の数値を与えないまま尺度として使われることになる。抽象名詞が関数詞として働くのを毛利(1992:8)は「関数詞どまり」と呼び、与えられるべき数値は含意として伝えられるとした。

さらに、毛利は(35)のような関数詞どまりをさらに推し進めた例もあげている。ここで問題となる量は、the large amountとでもいうべきところであるが、それは言わぬが花として明示を避け、相手の推論に任せる。焦点をぼかす妙味があり効果的である。

(35) We are delighted to see you here—the amount we’ve heard about you!

(36) The authority of her tone had its effect. (Christie, “How does Your Garden Grow?”)

(37) The happiness of a married man depends on the people he has not married.

(Wilde, *A Woman of No Importance*)

(36) (37) もともに抽象名詞が絶対既定の尺度として機能し、その数値は封じ込められている。それを掘り起こしてこそ、とくに(37)のひねりのきいた警句の味わいにたどりつける。つまり、幸せの危うさが導き出されて、警句として成立できる。

Grundy(2000:70)は、コカコーラの宣伝文 “It’s the taste.” を挙げて、違う文脈で生じる違う意味も指摘している。Tasteという程度(degree)¹⁴⁾を含む語の尺度的ふるまいに注目したものである。絶対既定の尺度としての味の良さに対し、文脈によっては有標に味の悪さをも表わしうる。この場合、数値自体は与えられないまま絶対的尺度として使われているためであり、その問題となる数値は文脈から推論されなければならないことになる。

さらには、(38)のように関数詞までとばして、変項に入るべきeggsだけで示す場合すらある。ここでは明示されてはいないが、多量の卵が搬入されていることを窺わせる。

(38) You wouldn’t believe the eggs that goes into that house! (毛利 1992)

このような関数詞をめぐる表現の多様さ、特に数値をあえて言わない表現まで射程に入ると、非常に興味深い、ある種の英語の圧縮した表現法を垣間見ることができる。

同様に尺度の数値が潜在化した例として、Carston(2002:[7])は以下をあげている。どちらもごく当たり前の言い方であっても、角括弧に入ったような評価が含まれた解釈が、語用論的に導かれることを指摘する。これは、文脈により富化された命題、すなわち表意を構成し、さらにそこから推意が導かれるのである。このように対照的に、潜在化された数値を掘り起こすことで導かれるものがあり、とくに(40)のように文脈により掘り起こされ

14) Bolinger(1972) 参照。端的には、very muchなどと共起できるかなどで判定できる。

る評価が異なる場合もある。

(39) Sally has a brain. [VERY GOOD BRAIN]

(40) Something has happened. [SOMETHING IMPORTANT/TERRIBLE]

毛利(1992:7)ではこのような表現を、定数の c を与えることを留保し、それを含意として聞き手に読み取らせる表現、「前提どまり」の表現と呼んで、(41)をあげている。

(41) Try and get a good night's rest tonight. You'll need it after what you've been through.

(毛利 1992)

(42) Health is what we want in modern life. (Wilde, *A Woman of No Importance*)

(42)でも同様に、どの程度なのかを明示するような数値はないが、そこに潜む評価値を掘り起こしてこそ、豊かな命題となりうる。それは次例でも同様である。

(43) He is a good doctor, as doctors go nowadays. (毛利 1972)

(43)は、as節を付加することで今時の医者（の悪さ）が含意され、医者としての力量に実は制限がつけられている。今時の医者は悪いという相場であるが、その中で見れば良いということになる。全面的に評価するのではなく、付加節で尺度という限定条件を付けた評価というところに着目し、潜在化された数値を推論する必要がある。まず、あくまで相対評価としてであり、絶対評価はさらに推論して導かれることになる。

さらに、隠れた評価値を掘り起こしてみよう。

(44) He remembered the perfection of her acting the first day he had come and the bungling of her husband. (Christie, "How does Your Garden Grow?")

(44)はある夫婦が最初に登場した時の印象を述べたものである。絶対規定のperfectionに対してbunglingが対比的に示されることで、夫のへまぶりのひどさが浮かびあがる。

(45) On a good day he is very good-looking. This is a bad day. (Parker, *An Ideal Husband*)

(45)のような文を超えた例も見よう。三段論法でいけば、He is not very good-looking today. となることを、言わぬが花のままにして、あとは相手の推論に任せている。

(46) I can resist everything except temptation. (Wilde, *Lady Windermere's Fan*)

(46)では、最初の想定が最終的には180度転換されてしまう。例外の値が「誘惑」ということになれば、例外の構図は根幹から崩れて、全否定になってしまう。しかしながら、単に“I cannot resist temptation.”とした場合と比べると、表意形成における労力は多くとも、それによって得られる認知効果は大きい。

数値や評価の程度をあえて言明せずとも、推論されることがある。このような推論の可能性を前提として、情報提示が絡んだ表現が使用されているといえよう。

3.4 進行形表現と解釈

最後に、動詞をめぐる尺度含意の1つとして、進行形表現を取り上げてみたい。進行形には、アスペクト的な基本的意味以外に、非アスペクト的な認識的用法がある¹⁵⁾。前者は、

15) Goldsmith & Woisetschlaeger (1982), Leech (2004³⁾)などを参照。

進行形をとる動詞の意味特性が時間との関係でどのように事象を記述するかに求められる。後者は周縁的に扱われることが多い語用論的用法であるが、単純形と比較してみるとその特徴的な効果が指摘される。

ところでBolinger(1972)は、形容詞や副詞以外に名詞や動詞も程度を表すことがあると指摘し、発話や心的動詞の意味特性にも程度を認めている。このような動詞に進行形が使われると、単純形を使う場合と比べ、程度が問題となり、尺度含意が働くことになる。これは、前節でみたような、全面的評価と限定条件を付けた評価の使い分けが、単純形と迂言形である進行形の使用にも反映していると考えられる。単純形の表すものと比較対照することで¹⁶⁾、進行形のもつ尺度含意から、断定を避ける尺度へのこだわりを推し量ることができる点について、とくに控え目や丁寧さ、あるいは誇張を含む表現を取りあげて考察したい。単純形の場合ほど全面的ではないので、発話の力や確信度が下がるという推論が可能となる。つまり、動詞の持つ発話の力に限界性が課せられるのである。

(47) “You haven’t told what you think?” said Tuppence.

Mr O’Rourke smiled, that same slow ferocious smile. “I’m thinking that the man is safe somewhere—quite safe.” (Christie, *N or M*)

(47)では、現在単純形で正面切って意見を求められ、進行形で返答している。ここに単純形のもつ発話の断定性を回避する進行形の使用がみられる。確信度について留保するので自らの心的状態を表す発話の力が弱められ、控え目な表現となる。

一方(48)のように、相手に対し働きかける場合に進行形が使われると控え目、さらには相手に配慮するネガティブポライトネスと連動して、押し付けや決めつけをしない丁寧さが導かれることになる。これがいわゆる進行形の丁寧表現である。

(48) I’m hoping you’ll give me some advice. (Leech 2004)

(49) “You are not thinking of leaving Helmmouth for a day or two, I hope, Mr. De Sousa?”

“You speak very politely, Inspector. Is that an order?”

“Just a request, sir.” (Christie, *Dead Man’s Folly*)

(49)では、警部が重要参考人に対して暫く現地を出ないように要請している。しかしこの場合、丁寧さを表す進行形が使われた要請の表現に隠された発語内行為が物議を醸すことになる。相手は、その表現の丁寧さは認めながらも、実は命令かと質している。それをうけ、あくまでお願いだと力を弱めて弁明している。この進行形表現以降のやりとりから、表意と推意の各レベルにおいて導き出される進行形表現の発話の力とその効果が異なっていることが窺われる。文脈により、引き出される推論は異なるのである。

次に誇張表現の場合を見てみよう。これはalways やcontinuallyなどの頻度副詞と一緒に使われ、使われる動詞は控え目表現のような程度を持つ動詞とは限らない。ここでは、動

16) I think (/am thinking) that’s the case.などのように、単純形と進行形のどちらも使える場合がある。そこから分化する形で、進行形を有標的に使用することで、命題に対する話者の態度が顕現化されると考えられる。

詞というよりはむしろ副詞が表す程度が問題となっており、そうであったとしても、結局は単純形で表わされるような一般化には達していないということが導かれることになる。それが可能になるのは、進行形が頻度副詞のもつ尺度と連動しているためである。いくら量的に例があったとしても、そういうものだと質的に割り切る判断には至らない、有標の話者の命題態度の程度を示すことになる。この割り切れないという思いが、感情を伴う表現となるのも、ある意味自然なことであろう。そしてときには、(50)のように受け入れ難いという非難めいた態度さえ酌みとれることになる。

(50) Every body is always supposing that I am not a good walker! (Austen, *Persuasion*)

(51) “I was always having rows with him,” said Captain Wyatt. “But I always have rows with every one,” he added as an afterthought. (Christie, *Cat Among Pigeons*)

(51) では、容疑者が巧みに、進行形と単純形を使い分けている。進行形で表わされるようなことは、単なる一例に過ぎないと強調している。むしろ、被害者(him)だけでなく、そもそも誰とでも悶着を起こすのだと、単純形による一般論に逃げて、疑惑をかわそうとしている。意識的に進行形表現の尺度含意を援用し、特別視することでないかと推論を誘導する。

以上恣意的にはあるが、尺度の上下関係を対照的に明示した比較構文、尺度を棚上げして新たな尺度幅を提示する疑似仮定構文、尺度の数値自体を拡散させてしまう構文、さらには尺度を含んだ進行形の用法の解釈をとりあげた。尺度が評価のために使われるとするならば、常にどの程度であるのかと、何と比較対照するのかが問題になる。これらが、ことばに明示的にあるいは非明示的に含まれる尺度によって伝えられ、またそれを酌む必要があることを考えれば、尺度含意が表意形成に貢献している例証となったと考えられる。

4. おわりに

Grice以降の語用論の発展の1 つに、言語的入力から語用論の出力への視点の転回がある。ことばに込められた情報(what is said)は一般的に非常に不完全で、それを明示的に伝えられる命題(proposition explicitly communicated)とするためには、本稿で見たように語用論的推論が決定的な働きをする。一方で、語用論的推論の結果である伝えられる情報(what is communicated)は、真理値を含め非常に豊かな命題内容をもった想定集合(a set of fully propositional thoughts or assumptions)である (Carston 2006: [6])。このことから、語用論的推論の多様な働きが浮かび上がってくる。

関連性理論では、言語形式を基に作られる表意とそこからさらに形成される推意に分け、そのどちらにも語用論的推論が貢献すると考える。語用論的推論は、表意においても文脈により自由に拡充を行い、豊かな表意を形成する。つまり、Carston (2002:[8]) の言う、語用論的に富化させた命題表示の構築 (the (pragmatic) construction of fully propositional representations) をめざすのである。そして、語用論的推論システムでは、表意と推意が相

互に並行して調整 (mutual adjustment of explicatures and implicatures)を行う。このように認知的心理的解釈プロセスを射程に入れる点でGrice流の考え方と分岐する。

関連性理論は、従来のimplicatureをより厳密に扱うことにより、語用論的推論の場を拡大している。その結果、自由な解釈の場をも拡大したことになり、より自由なコミュニケーションのありさまを対象とすることができるのである。それは、関連性理論が話者の意味のみを扱うのではなく、発せられたことばを手がかりにどのようにそれを埋め合わせて、言わんとするところを酌み取るかという、そもそもの立脚点に還元されるのである。

尺度含意は、実にさまざまな形で言語表現に織り込まれている。それを掘り起こしてこそ、豊かな表意が形成されるのである。したがって、尺度含意は表意形成に資する語用論的推論であると言えよう。さらに、このような尺度含意を含んだ構文の解釈に生じうる差をも、関連性理論では扱うことができるのである。最後に、尺度を含んだ表現は本稿で取り扱ったもの以外にも多種多様であるが、それらについては今後の課題としたい。

参考文献

- Bach, Kent. 2005. "The Top 10 Misconceptions about Implicature." In Birner, B. and G. Ward (eds.), *Drawing the Boundaries of Meaning: Neo-Gricean Studies in Pragmatics and Semantics in Honor of Laurence R. Horn*, 21-30. Amsterdam: Benjamins.
- Bezuidenhout, Anne L. and Robin K. Morris. 2004. "Implicature, Relevance and Default Pragmatic Inference." In Noveck, I. A. and D. Sperber (eds.), *Experimental Pragmatics*, 257-282. London: Palgrave Macmillan.
- Bolinger, Dwight. 1972. *Degree Words*. The Hague: Mouton.
- Carston, Robyn. 1995. "Quantity Maxims and Generalized Implicature." *Lingua* 96, 213-244.
- Carston, Robyn. 1998. "Informativeness, Relevance and Scalar Implicature." In Carston, R. and S. Uchida (eds.), *Relevance Theory: Applications and Implications*, 179-236. Amsterdam: John Benjamins.
- Carston, Robyn. 2002. "Linguistic Meaning, Communicated Meaning and Cognitive Pragmatics." *Mind and Language, Special Issue on Pragmatics & Cognitive Science* 17 (1/2), 127-148. (<http://www.phon.ucl.ac.uk/home/robyn/pdf>, [1-17])
- Carston, Robyn. 2005. "Relevance Theory, Grice and the neo-Griceans: a response to Laurence Horn's 'Current issues in neo-Gricean pragmatics.'" *Intercultural Pragmatics* 2-3, 302-319. (<http://www.phon.ucl.ac.uk/home/robyn/pdf>, [1-19])
- Goldsmith, John and Erich Woisetschlaeger. 1982. "The Logic of the English Progressive." *Linguistic Inquiry* 13, 79-89.
- Grice, H. Paul. 1961/1989. "The Causal Theory of Perception." Reprinted in Grice 1989, *Studies in the Way of Words*, 22-40. Cambridge, MA: Harvard University Press.

- Grice, H. Paul. 1967/1975. "Logic and Conversation." Reprinted in Cole, P. and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.
- Grundy, Peter. 2000. *Doing Pragmatics, second edition*. London: Arnold.
- Gundel, Jaenette K. and Thorstein Fretheim. 2004. "Topic and Focus." In Lappin, S. (ed.), *Handbook of Contemporary Semantic Theory*, 299-319. Oxford: Blackwell.
- 東森勲・吉村あき子. 2003. 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション』(英語モノグラフシリーズ21) 研究社.
- Horn, Laurence R. 1996. "Presupposition and Implicature." In Lappin, S. (ed.), *Handbook of Contemporary Semantic Theory*, 299-319. Oxford: Blackwell.
- Horn, Laurence R. 2004. "Implicature." In Horn, L. R. and G. Ward (eds.), *The Handbook of Pragmatics*, 3-28. Oxford: Blackwell.
- Horn, Laurence R. 2005. "Current Issues in Neo-Gricean Pragmatics." *Intercultural Pragmatics* 2 (2), 191-204.
- Horn, Laurence R. To appear 2007. "William James +40: Issues in the Investigation of Implicature." In Rerrus, K. (ed.) *In Honor of Grice*. (http://www.yale.edu/linguist/faculty/horn_pub.html, [1-23])
- Jespersen, Otto. 1940. *Modern English Grammar on Historical Principles, Part V*. London: George Allen & Unwin.
- 小泉保 (編). 2001. 『入門語用論研究—理論と応用』 研究社.
- Kjellmer, Göran. 1975. "The Weather Was Fine, If Not Glorious: On the Ambiguity of Concessive If Not," *English Studies* 56, 140-146.
- Leech, Geoffrey N. 1971/2004³. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Leech, Geoffrey. N. 1983. *Principle of Pragmatics*. London: Longman.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- 毛利可信. 1972. 『意味論から見た英文法』 大修館書店.
- 毛利可信. 1980. 『英語の語用論』 大修館書店.
- 毛利可信. 1992. 「焦点拡散の論理構造」『成田義光教授還暦祝賀論文集』 3-16, 英宝社.
- 森住衛. 2004. 『単語の文化的意味—friendは「友だち」か』 三省堂.
- 中島文雄. 1961. 『英文法の体系』 研究社.
- 大田朗. 1980. 『否定の意味—意味論序説』 大修館書店.
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre. 1995. *Relevance: Communication and Cognition, second edition*. Oxford: Blackwell.
- 鷹家秀史. 2000. 「A, if not B構文の曖昧性」『英語表現研究』 第17号, 1-10.

- 田中廣明. 1997. 「会話の含意の棚上げと阻止現象—if any, if anything, if ever, if not, not until—」
『徳島大学言語文化研究』 4, 117-135.
- van Kuppevelt, Jan. 1996. “Inferring from Topics: scalar implicatures as topic-dependent inferences.” *Linguistics and Philosophy* 19-4, 393-443.
- Wilson, Deirdre and Carston, Robyn. 2007. “A Unitary Approach to Lexical Pragmatics: Relevance, Inference and Ad Hoc Concepts.” In Burton-Roberts (ed.), *Advances in Pragmatics*, 230-260. London: Palgrave. (<http://www.phon.ucl.ac.uk/home/robyn/pdf>, [1-42])
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 ひつじ書房.
- 吉村あき子. 1999. 『否定極性現象』 英宝社.